

千葉常胤生誕九〇〇年記念

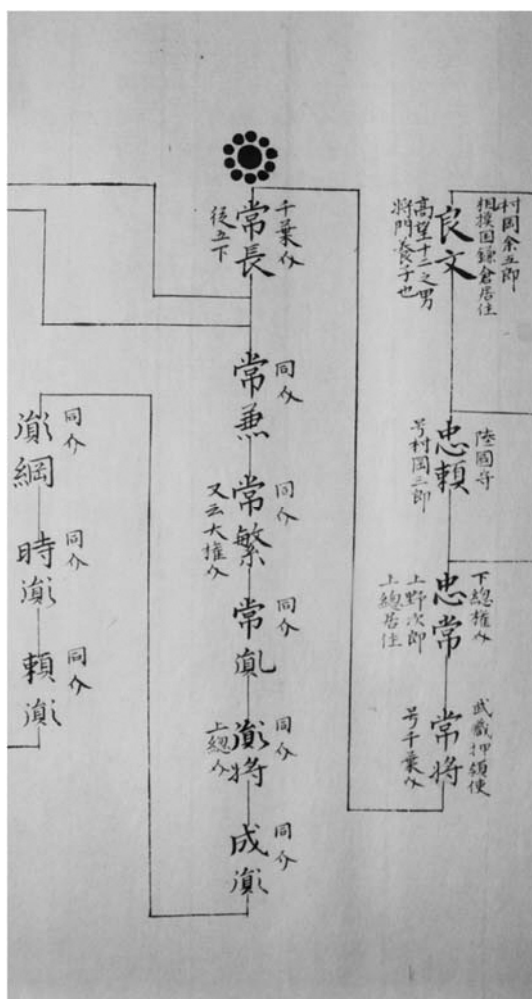
平成29年度 千葉市・千葉大学 公開市民講座

於・千葉大学西千葉キャンパス 平成三〇年二月三日(土)

# 千葉常胤の語られ方

## — 軍記物語の世界から

千葉大学大学院人文科学研究院 准教授 久保 勇



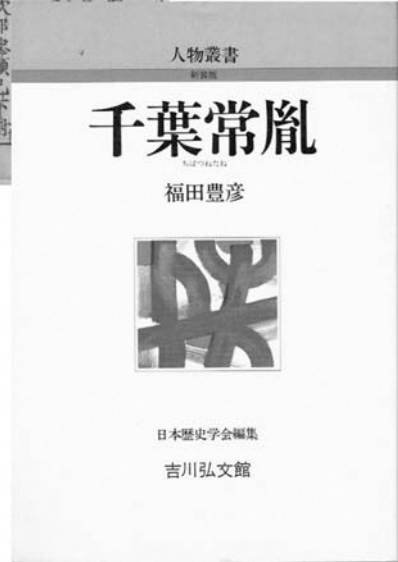
『徳島本 千葉系図』 (複製・千葉市立郷土博物館蔵)

### ◎ 本日の内容

#### ▽ 開催案内から

千葉常胤の伝記については、福田豊彦氏による『千葉常胤』(一九七三)によって広く知られるところですが、ただし、そのすべてが史料によって構成されているわけではありません。史書『吾妻鏡』に負うところが多いのですが、これと通じる情報あるいは異なる物語を展開するのが『平家物語』の異本(延慶本等)です。軍記物語の世界で語られる常胤を紹介しながら、その人物像の輪郭を考えていきます。

『吾妻鏡』(慶長元和版)  
国立国会図書館デジタル  
コレクション



難已忘防殿此間胤頼獲其首  
 十四日 癸亥 下總國千田庄領家  
 部御成朝臣聖也平相國權閏通其  
 跡之由率軍兵欲襲常胤依之常胤孫  
 戰遂生勇親或訖  
 十五日 甲子 武田太郎信義一傳次郎忠頼已下  
 得信濃國中凶徒去夜歸甲斐國于通月山而今日北  
 條殿到其其所給被示仰起於各等  
 十七日 丙寅 不待廣常參入令向  
 下總國給千葉介  
 常胤相其子息太郎胤正次郎師常胤三郎胤成石四  
 郎胤信大舅五郎胤道舅六郎大胤頼舅孫小太  
 郎成胤等參會于下總國府從軍及三百餘時也常胤先

福田豊彦氏『千葉常胤』  
(新装版)  
吉川弘文館 一九八七

## 軍記物語の世界

3

「軍記」：戦争を材料にして記述された書物。

軍記物。軍記物語。戦記。軍書。

(小学館『日本国語大辞典』)

### ・代表的作品

『将門記』 『陸奥話記』 『後三年記』 『初期軍記』

『保元物語』 『平治物語』

『平家物語』 『承久記』

四部合戦状

『太平記』

『義経記』 『曾我物語』

『明德記』 『応永記』 『嘉吉記』 『応仁記』

『太閤記』 (小瀬甫庵)

↓作者未詳。原本喪失。…成立論

↓多くの異本が現存。…諸本論

↓多様な受容と変容。

## 軍記物語の世界 『平家物語』の諸本

4

### 〈読み本系〉

延慶本・長門本・源平盛衰記

四部合戦状本・源平闘諍録

### 〈語り本系〉

#### ①灌頂巻型(一方系)

覚一本(龍谷大学蔵本、高野本)

覚一本近似の諸本(京師本、下村時房刊本)

流布本

#### ②断絶平家型

屋代本

覚一系諸本周辺本文(百二十句本等)

中院本(八坂系一類本B)

城方本(八坂系二類本B)

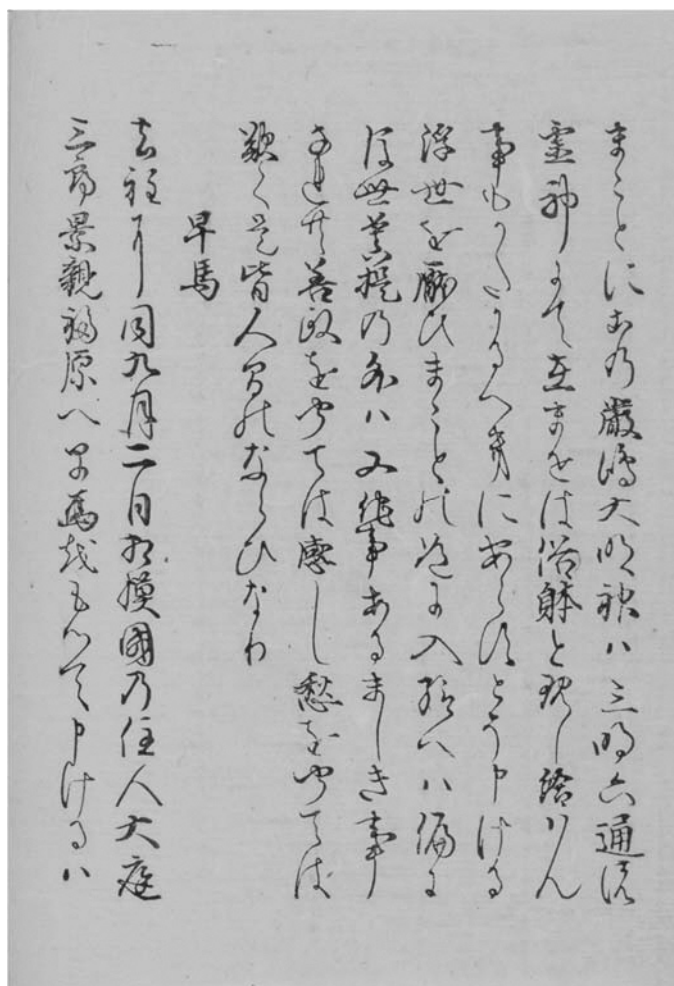
佐伯真一氏・櫻井陽子氏「『平家物語』諸本一覽」より

(『平家物語大事典』東京書籍二〇一〇)

# 軍記物語の世界 『平家物語』の諸本

## 〈語り本系〉 下村本（十二巻・古活字）

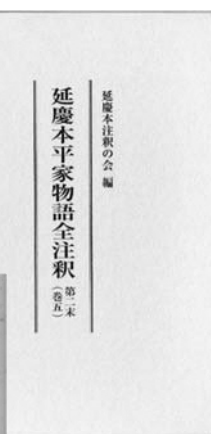
国立国会図書館デジタルコレクション



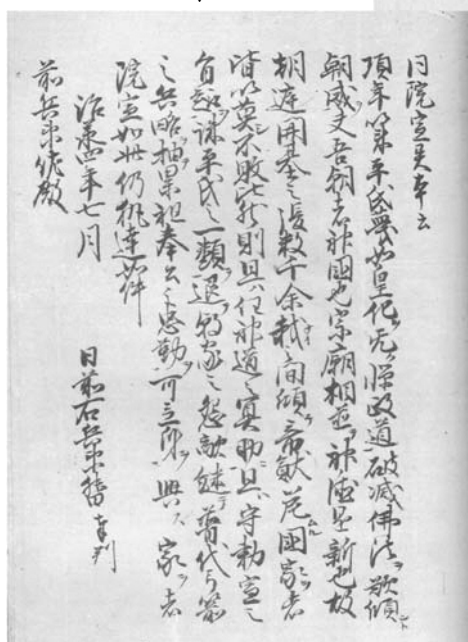
覚一本（かくいちぼん）語り本系諸本の代表。明石検校覚一が応安四年（一三七一年）に制作。現代で多く読まれている『平家物語』（『注釈書』の底本）は覚一本である。古写本として、龍谷大学蔵本と東京大学蔵（覚一別本、高野本）とがある。右は覚一本に近似本文を有し、古い時期の板本（古活字本）の下村時房刊本。

# 軍記物語の世界 『平家物語』の諸本

## 〈読み本系〉 延慶本（十二巻）



延慶本（朽木本）  
山田孝雄『平家物語考』  
1911より ↓

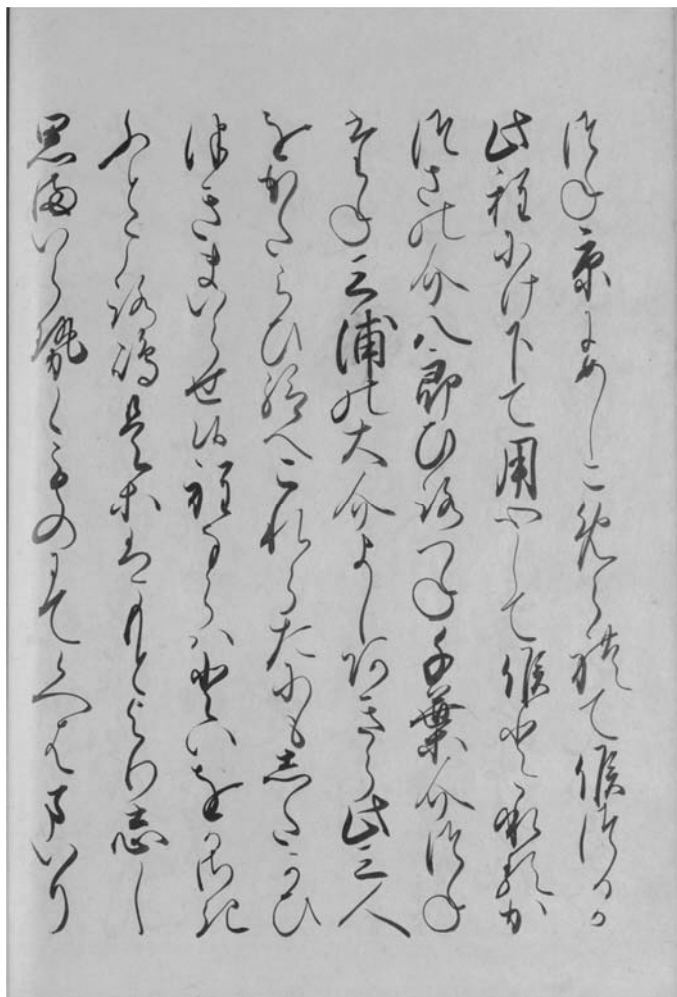


延慶本（えんきょうぼん）重要文化財。読み本系諸本の一つ。延慶二（一三〇九）・三（一〇〇）年に根来寺（和歌山県）で書写された奥書を有するが、現存本は応永二六（一四一九）・二七（二〇）年に書写。現存諸本中、古態をとどめる本として注目され、『平家物語』研究で現在もつとも対象とされる本。

# 軍記物語の世界 『平家物語』の諸本

## 〈読み本系〉 長門本 (二十卷)

国立国会図書館デジタルコレクション

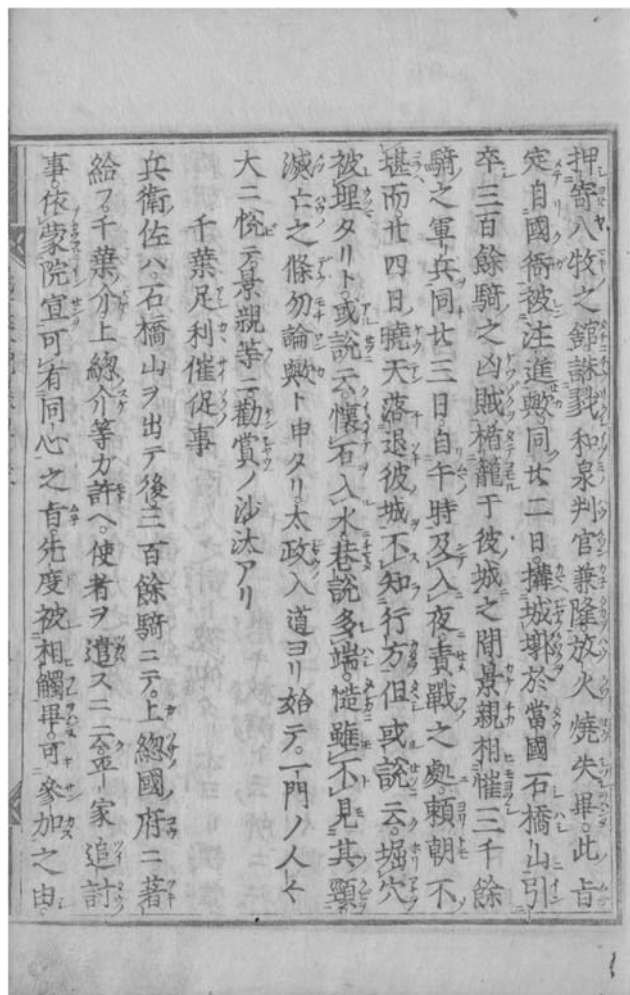


長門本 (ながとほん)  
古態をとどめる延慶本と兄弟関係にある。『平家物語』は十二巻が最も多いが、珍しく二十巻 (二十冊) 構成をとる。室町文芸的志向が特徴だが、一部延慶本よりも古態をとどめる部分も指摘されている。

# 軍記物語の世界 『平家物語』の諸本

## 〈読み本系〉 源平盛衰記 (四十八巻)

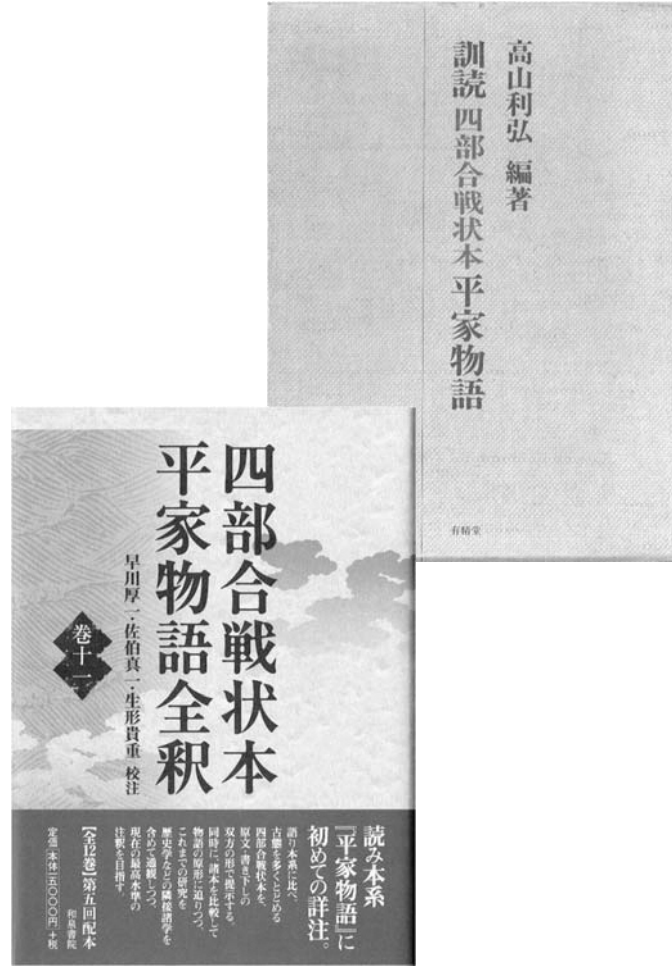
国立国会図書館デジタルコレクション (寛永整版本)



源平盛衰記 (げんぺいじょうすいき)  
四十八巻構成で各巻「イロハ…」で示される。記事分量が最も多く、一字下げで異説や注釈の内容を記す体裁が特徴。成立は一四世紀前半頃とする説が一般化しつつあるが、定説を見ない。現存本は一六世紀半ば以降本文で、慶長古活字版を底本として研究することが多い。

軍記物語の世界 『平家物語』の諸本

〈読み本系〉四部合戦状本（十二巻＋灌頂巻）



四部合戦状本（しぶかつせんじょうほん）  
 かつて古態論争の中心にあつた一異本。元亨三・四年（一二三三・二四）以前の成立とされるが、異論もあり一定しない。  
 真名本で、巻二・八は現存しないが「灌頂巻」を特立する。  
 盛衰記と重なる部分に共通祖本が想定され、それに周辺資料を取り込んで現存本が生成されたという説がある。

軍記物語の世界 『平家物語』の諸本

〈読み本系〉源平闘諍録（五冊）



講談社学術文庫  
 1999・2000年

源平闘諍録（げんぺいとうじょうろく）  
 真名本。内閣文庫（現・国立公文書館）蔵で、五冊しか伝わっていない。建武四（一二三三七）年に書写されたものを文和四（一二三五）年に再び写したという識語を有する（巻一之下）。千葉氏に関わる独自の記事を有する。延慶本からの影響、四部本と源平盛衰記との共通祖本から生成された痕跡をとどめている。

『徒然草』二二六段【資料1】

及鳥羽院御時、遠近、日、長、誓、た、れ、  
か、ま、れ、あ、わ、ら、り、の、樂、音、乃、由、論、義、の、爲、に、  
り、す、れ、ん、七、徳、衆、を、や、ろ、と、進、め、り、け、し、は、  
子、徳、冠、者、と、異、ん、ば、け、し、ふ、ろ、を、あ、ら、  
う、き、と、し、り、て、學、問、を、捨、て、道、世、志、し、り、  
ん、家、を、兼、持、和、尚、一、藝、あ、る、もの、成、り、下、部、  
ま、る、も、う、と、ま、す、て、不、便、小、意、せ、お、け、し、は、

け、信、儀、乃、を、扶、持、し、お、ろ、わ、せ、り、  
夢、家、志、物、を、作、り、て、生、佛、と、し、ひ、く、る、旨、目、に、  
と、り、へ、て、く、ろ、く、せ、き、わ、さ、て、山、門、乃、こ、を、  
こ、ろ、に、ゆ、く、と、か、ん、り、九、席、判、友、お、ろ、ま、  
く、り、と、知、て、お、資、の、せ、う、り、藩、の、冠、者、乃、  
事、い、ら、ん、と、志、す、さ、わ、け、ら、る、や、お、ろ、く、れ、  
事、い、た、る、も、と、せ、り、武、士、乃、事、ら、ん、と、志、  
わ、さ、い、生、佛、東、國、れ、も、乃、と、て、武、士、に、と、い、  
き、て、り、く、せ、ん、わ、は、生、佛、り、生、れ、つ、き、れ、  
夢、を、と、お、ひ、い、は、師、い、ま、あ、ひ、う、ろ、あ、わ、

嵯峨本（古活字本）  
国立国会図書館デジタルコレクション

松尾葦江氏の指摘【資料2】から

『徒然草』二二六段の成立伝承

↓琵琶法師に語られる『平家』（十二巻  
本平家物語）の成立⇨旧来の枠組み

読み本系『平家物語』

↓詳細な「頼朝拳兵記事」を有する『平  
家物語』の古態性⇨新説

※「生仏、東国の者にて、武士に問ひ聞  
きて、書かせけり」をどう説明するか。

十二巻本の「頼朝拳兵記事」【資料3】

## 千葉常胤の語られ方

―頼朝挙兵記事の周辺

### ①北条時政の進言

【資料4】 「三人だにも」から

※長門本もほぼ同じ内容

与力する三人の「介」が並立して語られる

↓【資料5】 【資料6】との比較

【資料4】 「違ふ事な」き時政の言葉

※長門本にはこの部分なし

「日本国は御手の下」という未来を見通す

↓【資料5】に掲出しながほぼ同。「其詞

一事モ違事ナカリケリ」と結ぶ。

## 千葉常胤の語られ方

―頼朝挙兵記事の周辺

### ①北条時政の進言

【資料5】 千葉介経胤と三浦介義明の心性

↓延慶本・長門本なし。

【資料6】 風にしたがう本草のごとくにて

あながち奉公いたさずともきかず

【資料5】 広常と都の間でのトラブル

↓忠清の讒言により都から招請される広常。

【資料4】 召し籠められたのは子息能経。

【資料6】 召し籠められたのは上総介。

※【資料6】一連の佐々木家家伝にある「奉公初日記」

とともにあった「佐々木系図」末尾には「康永三年」

(一三四四)とある。延慶本に依拠した可能性。

## 千葉常胤の語られ方

### ―頼朝挙兵記事の周辺

#### ②上総介広常・千葉常胤の反応

【資料7】廻文伝達の経過

↓「広経」「経胤」の並列。「経胤等」の活躍（「旧恩」「新功」）「喜」んで了承。

【資料8】並列したまま「左右なく領状」

結果的に、義明の対応のみに焦点が移る。

【資料9】常胤が先、広常に相談して返答する展開。子息による諫言により、受諾。

（院宣＋御教書と在地の論理との対照）

その後、盛長が広常を説得し快諾（発話は明確に広常のもの）。

【資料10】【資料9】と逆の展開。

※盛衰記【資料5】の人物描写との「割れ」

※延慶本の不明瞭な本文展開。

## 千葉常胤の語られ方

### ―頼朝挙兵記事の周辺

#### ③房総での頼朝

【資料11】父母として頼られる広常・常胤

↓頼朝の命運が「兩人が意」次第。

【資料12】母として頼むのは胤経。

【資料13】「司馬をもつて父となす」。

【資料16】常胤Ⅱ「妙見菩薩の御渡り」。

※頼朝にとっての父母の記憶は『平治物語』の問題。

※「司馬」をめぐる『吾妻鏡』の世界。

※妙見信仰を軸に再構築された『源平闘諍録』の世界。



# 千葉常胤の語られ方

## ―頼朝挙兵記事の周辺

17

【参考】『平治物語』（学習院本）下巻

「頼朝、去年三月一日、母にをくれ、今年正月三日、父におくれぬ。さだまれるみなし子となりて、哀、不便と申人も候はぬに、かやうに御たすけ候へば、その恐候へ共、父とも母とも、此御方を頼申候はん」とて、さめぐと泣きければ、……

（日下力校注・岩波新日本古典文学大系43）

※「みなし子」頼朝というモチーフ。

※『平治物語』において、頼朝の父・義朝軍に参軍して、頼朝を含めた敗走勢（二百余騎）にあつたのは上総介広常。

# 千葉常胤の語られ方

## ―頼朝挙兵記事の周辺

18

【参考】『吾妻鏡』の「司馬」

治承五年（一一八一）六月十九日条  
武衛納涼逍遙のために三浦に渡御す。かの司馬の一族等、兼日に結構の儀ありて、殊に案内を申すと云々。

（司馬Ⅱ三浦義澄）

養和二年（一一八二）一月二十三日条

伯耆守時家、武衛に初参す。これ時忠卿の息なり。継母の結構によつて上総国に配せらる。司馬これを賞翫せしめて賀君となす。

（司馬Ⅱ上総広常）

建暦三年（一一一三）二月十五日条

千葉介成胤、法師一人を生虜り相州に進ず。これ叛逆の輩の中使なり。〈信濃国住人青栗七郎が弟、阿静房安念と云々〉合力の奉を望まんがために、かの司馬が甘繩の家に向ふところに、忠直を存するによつて、これを召し進ずと云々。

（司馬Ⅱ千葉成胤）

※『拾芥抄』「国守……掾〈司馬録事参軍事〉」

# 千葉常胤の語られ方

― 頼朝挙兵記事の周辺

付 『源平闘諍録』での語られ方

【資料15】 「鎌倉殿の左の一座」

【資料16】 「右兵衛佐頭を傾け渴仰」

【参考】 卷五・六 「義経、浮嶋が原において副

將軍と成る事」

又伊東の入道の三女は兵衛佐の本妻なり。…  
兵衛佐言ひけるは、「裕れこそ侍其の数多し  
といへども、日本の本の將軍と号する千葉介常  
胤の次男、相馬の次郎師常とは是れなり」と  
て、師常が方へ御使ひを以つて、「加様の次  
第なり。頼朝をば舅と思はるべし。頼朝は智  
と思ふべし」と仰せられければ…

※常胤の功績によって築かれた頼朝との関係性  
が子孫に及ぶ構想によって語られている。

# 千葉常胤の語られ方

― 軍記物語の世界から

◎まとめ

- ・ 諸本本文の多様な展開
- ・ 史資料から／への影響
- ・ 諸本作者の背景
- ・ 諸本の読まれ方



『鎌倉大評定』  
千葉市立郷土博物館蔵